

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (1/5)

学部・学科	総合社会学部・総合社会学科	職名	准教授	氏名	ヤマモトアキホ 山本明歩
学歴	平成 6年 3月 国際基督教大学教養学部理学科 卒業 平成 8年 3月 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士前期課程 修了 平成12年 3月 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士後期課程 単位取得満期退学				
学位	平成 8年 3月 文学修士(東海大学)				
専門分野	史学、文化人類学、語学教育				
専門資格	該当なし				
所属学会	平成17年10月 日本人類学会 平成23年 6月 全国語学教育学会				
受賞	該当なし				
担当授業科目	学 部 初年次演習、総合社会学実習E、英語リーディング ・ 英語コミュニケーション ・ ・ ・				
論文指導	該当なし				
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名 英語コミュニケーション ・ ・ ・		科目カテゴリー 講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	実施学期 春 ・ 秋	履修者数 約30名
	授業の概要： 1. イディオムの習得 2のDVDで使用されている英語表現を用いたクイズを毎週課す。これによって学生は自然な英語表現を覚えられるだけでなく、それがどのように用いられているのかを自分の目と耳で確認することで、よりの確に使うことができるようになることが期待される。 2. DVDを用いたリスニング能力向上 映画を用いたリスニングの訓練を行う。映像からのインプットが内容理解を深めることによってリスニングの能力向上に役立つことが期待される。 3. 相互ディクテーションの活用 相互ディクテーションを積極的に用いる教科書を使用する。				
1	教育活動の振り返り 教育活動の成果： ・ イディオムの習得については、覚えた表現を様々なコンテキストで使いこなす学生が見られた。しかし、継続的な学習を行った学生とそうでない学生に非常に大きな差が認められた。特にテスト前に覚え込もうとする学生は効果が薄く、しっかりと家庭で学習するかどうか重要であると考えられる。 ・ DVDを用いたリスニング能力向上については、最初のうちは「難しすぎる」という感想が多かったが、学期が進むに連れてリスニング能力が目に見えて向上していった。また、アンケートでも非常に学習効果が高いという結果が得られている。 ・ 相互ディクテーションの多用によって、自然に音読がなされるだけでなく、相手に聞き取ってもらうために丁寧な発音を心がける等の効果が得られている。 今後の課題： ・ 全般的に初期の段階で「自分にはどうせ無理だ」と諦めてしまう学生が見られ、このような学生にはあまり学習効果が見られない傾向が認められた。よって、初期段階での励ましやフィードバックによるドロップアウトの防止が重要課題として考えられる。				

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (2/5)

F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名 英語リーディング ・	科目カテゴリー 講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	実施学期 春 ・ 秋	履修者数 約30名
	<p>授業の概要：</p> <p>1. 語彙小テスト 教科書の語彙を用いた小テストを授業の冒頭で実施する。</p> <p>2. パワーポイントを用いた文法学習 パワーポイントを利用し、書き取った単語を並び替えて文章を作る教材を作成し、利用する。</p> <p>教育活動の振り返り 教育活動の成果：</p> <p>2. ・ 語彙小テスト：授業に入る前に小テストを行うことで、授業アンケートにおいても「毎回小テストがあり、勉強する気になった」というコメントが寄せられているように、勉強する体勢を取らせることが容易になった。</p> <p>・ パワーポイントを用いた文法学習：スプリングの正確さが向上すると共に、クラス全体として多い文法の間違い等を集中的に解説することで、そのクラスに応じた文法学習が可能になった。「文法を理解できた」、「英語の楽しさを改めて実感することができた」などの声が寄せられた。</p> <p>今後の課題：</p> <p>・ 機材の設定が変わっている等のために、パワーポイントを利用することができないことが数度あった。授業開始前、早めに教室に行って機材を確認する等の対策が必要であると感じられた。</p>			
<p>・ 学内外のFD関連講演会/セミナー等への参加実績</p> <p>1. FD講演会への参加 学内FD講演会(第2回)で「授業と評価をつなぐ為に ~ループリック評価入門~」講師：井上史子氏(帝京大学・高等教育開発センター・教授、平成27年3月5日実施)を聴講した。</p> <p>2. 授業をよりよくするためのアンケート 春学期2回と、秋学期2回の計4回、授業をよりよくするためのアンケートを実施し、またその結果については学生へのフィードバックを行った。</p> <p>3. 携帯電話を利用した授業での出席確認 春学期、秋学期ともに担当する2クラスで、携帯電話を利用した出席確認作業の補完を行った。具体的には、授業の冒頭で口頭による出席確認を行った後、授業開始後30分程度経過した頃に携帯電話による出席状況の確定を行い、この確認作業で出席になっていない場合には欠席扱いとした。これにより遅刻と欠席が学生にとっても教員にとっても明確になっただけでなく、口頭での確認作業と携帯電話を利用した確認作業を併用することで、それぞれが相互の短所を打ち消し合うという効果が得られた。</p> <p>4. 携帯電話を利用した小テスト実施 春学期、秋学期ともに担当する3クラスで、携帯電話を利用した小テストを実施した。授業の中でリスニングの問題に携帯電話で答えることによって、学生の回答結果を集計しやすくするとともに、遅刻の確認作業が授業の自然な流れに取り込まれた。また、学生の回答は授業中その場で確認できるため、正答率などの情報をリアルタイムでフィードバックすることができた。</p>				
<p>・ 教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等</p> <p>1. ネットアカデミー2を用いた家庭での学習環境支援 担当する3クラスで、原則毎日10分ずつネットアカデミー2を用いた英語学習を義務づけた。日々の学習状況は記録し、語学能力の向上と関連づけて分析している。</p> <p>2. TOEIC SQUAREを利用した英語教育 国際コミュニケーション境界のウェブサイト上で提供されているTOEICカレンダーを利用し、毎日届く3つの問題に答えるよう指導した。</p>				

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (3/5)

<p>H26 年度 研究課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 語学学習における認知言語学的背景 2. アナバプティストの行動原理 3. 英語コミュニケーション能力向上の方法
<p>平成 二六 (2014) 年度の研究活動の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語学習における学習ソフトウェアの効果的使用法とそれを応用した反転授業の可能性について研究した。英語学習の効果を高めるためには学習頻度を高めることが効果的であると考えられるが、そのためには授業時間外でいかに多くの時間を語学学習に費やすかという点が重要である。そこで、学習ソフトウェアを用いた家庭での英語学習の可能性について共同研究を行った。本研究では、データの収集と分析を行うと共に、より理想的なソフトウェアを求めて(調査活動)1に示す調査を行った。しかし、これらの家庭学習と授業における英語学習が効果的に結びついているとは言えず、反転授業等の形で効果を高める方法についても模索している。 ・ 後期旧石器時代以降の文化変化とパレオ・インディアンの関係性について研究を深め、パレオ・インディアンやネイティブ・アメリカンがプロト・ユーラシアンの典型例であることを考察した。研究成果については(論文)1にまとめた。
<p>平成 二六 (2014) 年度 の 主な 研究 成果 等</p>	<p>(著書)</p> <p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「プロト・ユーラシアンとしての『ネイティブ・アメリカン』」、単著、平成27年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究Vol.15 2. 「アルク・ネットアカデミーを利用した英語基礎力アップの方策」、共著、平成27年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究Vol.15 <p>(学会報告、学会活動)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. シンポジウムへの参加、平成26年11月、日本人類学会第68回年次大会、浜松アクトシティ <p>(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)</p> <p>(調査活動)</p> <p>平成26年 5月 IT教育に関する調査(第5回教育ITソリューションEXPO、於:東京ビッグサイト)</p> <p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等)</p> <p>(学内活動)</p> <p>総合社会学部研究報告編集委員会委員、入試委員会委員、研究成果刊行助成委員会委員、修学旅行生受け入れプロジェクト委員</p>
<p>平成 二六 (2014) 年度 の 社会 にお ける 活動</p>	
<p>平成 二一 ～ 二五 (2009～2013) 年度 の 主な 研究 成果 等</p>	<p>(著書)</p> <p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「英語学習にみられる生産性(productivity)の比較」、単著、平成24年3月、京都文教大学 人間学部研究報告第14集(pp.1-14) 2. 「アナバプティストの多様性」、単著、平成25年3月、京都文教大学 総合社会学部研究報告第15集(pp.11-26) 3. 「認知言語学と英語教育」、単著、平成26年3月、京都文教大学 総合社会学部研究報告第16集(pp.29-45) <p>(学会報告、学会活動)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. シンポジウムへの参加、平成23年11月、日本人類学会第65回年次大会、沖縄県立博物・美術館 2. 学会への参加、平成24年4月、横浜JALT、横浜市立大学

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (4/5)

平成二十一〜二十五 (2009〜2013) 年度の主な研究成果等

(学会報告、学会活動 つづき)

3. 学会への参加、平成24年10月、横浜JALT、横浜市立大学
4. シンポジウムへの参加、平成24年11月、日本人類学会第66回年次大会、慶応義塾大学日吉キャンパス
5. 学会発表「多様化する学生と大学英語教育の新たな取り組み」、共同、平成25年8月・9月、大学英語教育学会第52回(2013年度)国際大会特別企画グローバル・ポスターセッション、京都大学
6. シンポジウムへの参加、平成25年11月、日本人類学会第67回年次大会、国立科学博物館筑波研究施設

(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)

エッセイ:

1. 「宗教十色」、単著、平成24年3月、マイトリーチッタ第11号(p.2)

その他:

1. セミナーへの参加、平成24年9月、教育著作権セミナー、名古屋工業大学
2. 研究会への参加、平成25年11月、大学教育における「海外体験学習」研究会2013年次研究大会、於:和光大学
3. 人間学研究所共同研究プロジェクト「メディア・社会心理研究の有機的統合に関する共同研究」研究会への参加、平成26年2月、演題「集団アイデンティティと認知構造 社会心理学的アプローチの可能性」、於:Café Intellectuellen

(調査活動)

- 平成24年 5月 IT教育に関する調査(第3回教育ITソリューションEXPO、於:東京ビッグサイト)
- 平成25年 4月 ネットアカデミーを活用した英語教育の推進について調査(人間学研究所共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」に参加)
調査結果については、学会にて発表。 前述:(学会報告、学会活動)1
- 平成25年 5月 IT教育に関する調査(第4回教育ITソリューションEXPO、於:東京ビッグサイト)

(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)

(学内活動)

- 平成21年 9月 フェリス女学院大学英語担当教員対象FD研修会への参加
- 平成24年 3月 学内人権研修会への参加(1)
学内人権研修会で「「仏教教団と人権問題」講師:山北光彦師(浄土宗人権同和室長)」を聴講した。
学外人権研修会への参加(2)
関西沖縄文庫で行われた学外人権研修会へ参加し、沖縄県民の被差別意識や、基地問題についてどのような問題意識が持たれているのかという点について理解を深めた。
- 平成23年 4月 宗教委員会委員「平25.3まで」
人権委員会委員「平24.3まで」
国際交流委員会委員「平25.3まで」
オープンキャンパス委員会委員「平25.3まで」
拡大人間学部改組委員会委員「平24.3まで」
修学旅行生受け入れプロジェクト委員「現在に至る」
- 平成24年 4月 FD委員会委員「平25.3まで」
入試実行委員会委員「平25.3まで」
- 平成25年 4月 入試委員会委員「現在に至る」
高大連携委員会委員「平26.3まで」

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (5/5)

(NPO法人等の団体への参画)

平成18年 9月 横浜市上郷地区センターにおいて英語講師のボランティア「平22.3まで」

(小中高との連携授業の講師)

平成23年10月 京都文教高校において2011年度秋学期アドバンスレクチャー担当

「日本語の中の英語」というタイトルで和製英語と実際の英語表現の相違にスポットを当て様々な例について解説した。また、語学学習に置ける和製英語のメリット、デメリットについて解説し、語学学習の意識向上を図った。学習者はそれまで英語だと思い込んでいた表現が実はそうでないと知る事で、その意外性に驚き、また、英語では実際にどのように表現するのか推測するというアクティビティを通じて、英語に対する興味を高めることができた。

平成24年 2月 大磯町立国府小学校においてアメリカ合衆国、タイの文化について講義

国府小学校6年生の社会科学習の一環として、パワーポイントを使用して様々な写真を見せながら、日本とアメリカ、そしてタイの類似点や相違点についてクイズ等を取り入れた講義を行った。その結果、「外国のよさを知ることができました」「外国に自分も行ってみたいくなりました」「日本との違いに興味を持ちました」等の声が寄せられた。

(自治体や企業における研修等の講師)

平成22年 3月 株式会社ファイブアカデミーにて厚生労働省就労支援プログラムの一環として開講された英会話講師養成講座の講師を担当「平22.9まで」

(その他)

平成24年 9月 京都文教大学において2012年度公開講座を担当(京都文教教養講座 文化人類学科テーマ：身近な異文化交流 第2回講師)

「言葉と文化のすれ違い ~日本とアメリカを考える~」というタイトルで、捕鯨問題を中心として日本とアメリカの価値観の違いや議論の食い違いについて、インターネットの掲示板への書き込みを例として挙げながら具体的に解説した。また、その中で自文化中心主義が実は普遍的な現象であることや、一つの価値観が文化に固定されたものではなく、むしろ個人がおかれた状況によっても変化し得るものであることなどを聴衆とともに考察していった。

平成26年 3月 オープンキャンパス模擬授業、「言葉を考える」、於:京都文教大学